

文化財の保存修理

文化財について学ぶ⑥

文化財を後世に受け継いでいくために必須ともいえるのが、保存修理です。自然環境（温湿度、風雨、光、紫外線など）や化学物質による日常的な影響をはじめ、^{えんがい}塩害や^{ちゅうがい}虫害、さらには被災や事故などによる突発的要因を受けての損壊にいたるまで、文化財に限らず世の中に存在する物質・物体が劣化する原因は様々です。日常の道具は、壊れたり失われたりすれば新しいものと取り替えることもできますが、文化財は唯一無二であるため容易に再現することができません。もしも見栄え重視で必要以上の復元をしてしまえば、結果的に本来の材質や形状、技法などの歴史的価値を損ねてしまうこともあるのです。そこで、指定文化財の保存修理においては行政機関の指導のもと「新品同様に直す」のではなく「現状以上の劣化を防ぐ」ことを目的とするか、復元する場合は詳細な科学的分析を行い塗料や素材の根拠を明確にした上で、再現可能な範囲で補助的に実施されます。

右の写真は、^{あんようじ}安養寺（大田区西六郷）所蔵で12世紀頃の造像と伝わる「^{ぞうぞう}木造^{あみだによらい}阿弥陀如来^{ぎぞう}坐像（都指定文化財）」の、修理前後の写真です。さて、どちらが“修理後”だと思いますか。実は、右が「修理前」、左が「修理後」なのです。一見すると左側の像は^{きじ}木地があらわになったり指先が欠損したりと、いかにも^{いた}傷んでいそうな印象を受けますが、これは過去の修理による処置を取り外したためです。



安養寺所蔵「木造阿弥陀如来坐像」 修理前後写真

※通常非公開

画像提供：株式会社明古堂

この像はかつて“保護”ではなく“補強”を優先した処置を施したため、かえって本体に負荷がかかるという本末転倒な状態になっていま

した。そこで近年の再修理により、本来に近い状態で劣化の進行を防ぐことを優先した処置を施した結果、造像から約千年という時間の経過が^{かも}醸し出す、自然な風合いが現れた姿となりました。

現在、このような回帰的な保存修理が一概にすすめられているわけではありませんが、科学技術の進歩によって、将来的により良い保存方法が開発された時にそなえ、^{かぎやくせい}昨今は可逆性のある（＝元に戻すことのできる）方法で実施することが求められています。たとえば、^{くぎ}釘や^{かすがい}鋸で文化財に新しい穴を開けてまでつなぎ留めるのではなく、外枠で囲って固定したり、簡単にはがせて、かつ本体に影響を与えない自然由来の接着剤を用いる、などの手法です。かつては即効性や耐久性を重視し、当時の最新技術である化学製品が多用された時代もありましたが、徐々に文化財に悪影響を及ぼすことが判明したため、保存修理のあり方が見直されることとなりました。あくまでも、次世代へバトンを繋ぐという意識を持って取り組むことが重要なのです。